

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2019年9月 NO.211



[もくじ]

- 2～3 民間ロケットMOMO宇宙到達！～夢を忘れた大人たちへ～…山本真行
- 4～5 楽しい・おもしろい 駄美術、の世界…現代美術二等兵
- 6～7 生きたい場所がある。だから、生業を創る。…小松圭子
- 8～9 ワンポーズクリエイター®ってなに？…外山晴菜
- 10 ビブリオバトルのススメ…佐藤元紀
- 11 「アンテナ」役者、刈谷隆介さんとの出会い…下尾仁
- 12～13 高知市文化振興事業団6～7月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

民間ロケットMOMO宇宙到達!

夢を忘れた大人たちへ

山本 真行

一九六九年七月二十日は筆者にとって歴史でしかないが、この日アメリカの二人の宇宙飛行士が「アポロ11号」で月に降り立ち、星条旗を月面に立てた。二〇一九年はその半世紀後だ。子供の頃に抱いた二十一世紀初頭は、遙か彼方の未来。想像の中で人類は宇宙旅行を楽しみ、国際線のスペースプレーンが大陸間を数時間で結ぶ。クルマは空を飛び交い、美しい地球環境を取り戻し健康長寿の社会が実現、宇宙で生活する人々もいる。宇宙飛行士は「二〇〇一年宇宙の旅」で木星への任務に就いて久しい。―宇宙への飛躍を夢見た当時のイメージと現実の二〇一九年を比べれば、物足りなさを禁じ得ない。

生まれたのか? 木星旅行はともかく、月や火星程度であれば人類は既に行くための技術を持っていないことはない。様々な技術的困難はあれども、最大の困難は宇宙への投資が圧倒的に少ないことにあるのだ。夢の新技術の多くはまづ富豪が手に入れ、やがて富裕層から一般へと浸透してきた。自動車やスマホのように誰もがその恩恵に与るとき、マネーが技術革新を生む。宇宙もそのはずだ。もしも今を生きる大人の多くが、もう一度夢を思い出し、その未来に夢を託せるのなら。

飛行の宇宙旅行を商業化する水平離着陸型スペースプレーンの開発が最終段階にあり、既に関係者の「乗客」一名を載せ「宇宙」往還を成功させた。彼の国ではこういったベンチャー企業に山のように優秀な人が集まる。夢を追い続ける大人がいる。これは天賦の開拓精神か否! いまだ日本では出る杭が打たれ個性は伸ばされず調和が尊ばれる。親が安定を子に求める。曰く和の国ではあるが、大人が自身の夢を忘れ、あまりに過干渉に若い夢や野心を無気力化させていないか?

十三年、日本は世界で四番目に自力での宇宙開発が実現可能な国となった。現在JAXAの「はやぶさ2」探査機は小惑星リュウグウに二回の着陸を成功させ、二〇二〇年末ごろの地球帰還に向け最終段階にある。日本の宇宙飛行士の国際宇宙ステーション(ISS)長期滞在も日常的となった。たしかに宇宙開発は半世紀で大きく進んだ。しかし現状維持ではこの程度なのだ。国家主導の宇宙開発は実用・科学にせよ軍事にせよ税金のバイ以上に大きくはなり得ず、宇宙は身近とは言えない。多少の命の危険を冒しても本当に宇宙に行きたい人がどれだけいるか不明だが、日本の人口が今後しばらく増えそうにない以上、国に任せていては、いつまで経っても一般人が宇宙旅行に行ける日は来ない。

日本初の人工衛星から半世紀―北海道のインターステラテクノロジズ株式会社(IST)は小型衛星の低コスト軌道投入を目指したロケットの前段階として、観測ロケットMOMOを独自開発し宇宙への挑戦を続けている。そして令和の時代を迎えた四日目の二〇一九年五月四日、ついにMOMO3号機が高度一一三・四キロメートル

ルの宇宙に到達した。民間会社単独開発のロケットとして国内初の快挙であった！

私たちの研究室は、津波などの大規模かつ地球物理学的な現象の早期探知と防災／減災への活用を目指し、人間の耳には聞こえない重低音「インフラサウンド」の研究を続けている。災害をもたらすような地球規模の現象が起きるとき、巨大な空気振動が地球大気を揺らすのだ。私たちはインフラサウンドを効果的に捉えるセンサーの開発から、観測網の確立、観測網を用いた警報システムの構築へと歩みを進めている。音は地上だけでなく上空にも伝わるため、防災への活用には音の伝わり方の全体像の理解が重要な一歩だ。そこで私たちは高層大気中の音の伝わり方を計測する実験を提案し、MOMO3号機で民間ロケットを用いた初の科学観測に成功した。ロケットは高度およそ四〇キロメートルでエンジンは燃焼を終了し静かになる。そこから最高高度地点へ到達し下降して太平洋への着水までの間、静穏な上空で音の観測が可能だ。地上からは「音玉」（号砲火花）と呼ばれる火花を打ち揚げて予め人工的な音源を作り、高

層大気まで音がどう伝わるか観測ロケットでしかできない実験を試みた。結果は解析中だが、火花と思われる信号が思いのほか大きく見えワクワクしている。

そして早くも二〇一九年七月二十七日、I S T社はMOMO4号機を打ち上げた。今回は火花を打ち揚げず、静穏な環境下の比較データを得る予定だったが、残念ながら4号機は上昇中の何らかの異常検知によりエンジンが自動停止し最高高度一三キロメートルまでの飛行に留まった。しかし3号機の成功から僅か二カ月半後に4号機という高頻度で実験条件を少し変えて実験できる迅速さは民間ロケットの大きな強みで、必ずや研究進展に繋がると期待したい。今後の状況は未定だが、高知工科大学としても当研究室としても可能な限りMOMO5号機以降も宇宙実験に挑戦したい。

民間開発のMOMOロケットの魅力は、未成熟な点とその可能性にあると言える。北海道大樹町の、わずか二十名ほどの町工場で手製のロケットが作られ、高知の小さな大学の一研究室のセンサーが宇宙に行く。それを多くの人がクラウドファンディングで応援してく

れた。時代は変わりつつある。でもロケットはいつもワンチャンス、すべての部品が完璧に動かなくてはならない。学生たちにとっても、失敗や延期の重苦しさから成功の歓喜まで、現場で日々起きるそのすべてを肌で感じ宇宙開発を身近に経験できる最高の環境だ。

世界には、日本には、私たちに、多くの課題がある。宇宙開発よりも身近にあるいは切実に、日々の生活や命に関わる多くの命題がある。グローバル化の時代にあつて、隣国や彼方の大同土が仮想敵として睨み合っている場合ではない。ひとたび大地震が起きれば多くの命が脅かされる。科学技術は国家のためではなく地球人のためにあるべきだ。宇宙開発と軍事は表裏一体であつた。今もそうであろう。そこに大量の予算をつぎ込み破壊し疲弊する前に、どこか全世界ベクトルといった方向性を見つけ、挑戦することに人類社会は意義を見出せないだろうか。今の時代、もう物質的なモノはあまり必要とされていない。それでは経済が十分には回らない。情報や経験や夢や癒しを買う時代なのではないか？

私たちの宇宙旅行は、人類の火

星人着陸は、いつ実現するのだろうか。すべての夢物語は、それを空想し追いかける人たちによって受け継がれ、やがて実現すると信じた。―かつて少年だった大人たちの夢を乗せ、北海道の大空に懸命に上がっていくMOMO3号機を見て、そう思った。



北海道の夜明け前、打ち上げを待つMOMOロケット3号機と筆者

やまもと まさゆき

一九七一年 大阪府堺市生まれ。香美市在住。高知工科大学システム工学群教授。専門は地球物理学。観測ロケットや地上機器を用いた宇宙地球探査と防災活用をテーマとして学生と共に研究開発を続ける傍ら、高大連携の理科教育活動にも携わる。

楽しい・おもしろい

駄美術の世界

現代美術二等兵

今年五月の第七十一回高知市展の際、講演会をさせていただいた現代美術二等兵と申します。それまでまるで高知とは縁が無かったのですが、お声掛けいただけただけで光栄です。ユニット名に「現代美術」とついています、作っているものは雑貨のような、おもちゃのような、民芸品のような「駄美術」というものです。

美術ってなんだか小難しくて敷居が高い気しませんか？ お菓子には高級なスイーツや伝統的な和菓子がある一方、安っぽくて怪しげで、けれども親しみやすい「駄菓子」というジャンルもあります

よね。それと同じように美術にも

駄菓子みたいな「駄美術」があってもいいのでは？ という思いで、名付けました。どういふものかといいますが、額部分がリーゼントになったダルマ「ぐれダルマ」、鉄アレーにこけしの機能が付加された（ペイントされた）「こけしアレー」、有刺鉄線で作ったテディベア「抱っこしてちょ」などなど。こんな冗談のような、おやじギャグのようなものを作り続けて、もう二十七年になります。

京都市立芸術大学彫刻専攻卒の二人組で、大学を出て就職したのですが、「お金を出してギャラリ-

借りて作品展示したら、俺らも作家やで！」と作家のパロディというか、今思ったらすごい生意気な

動機で展覧会を開催。以後、特にやめるきっかけもなく、仕事をしながら創作と展示を続けています。

ユニットではあるのですが、作品はそれぞれが勝手に作って展覧会に持ち寄るソロ二人組方式（という方式があるのかもしれませんが）。

展覧会の当日お互いの作品を見ることになるので、その瞬間が何より面白いかもしれません。住んでいるのも東京と大阪に分かれていて、打ち合わせや会場の下見は近い方が出向くという営業所感覚

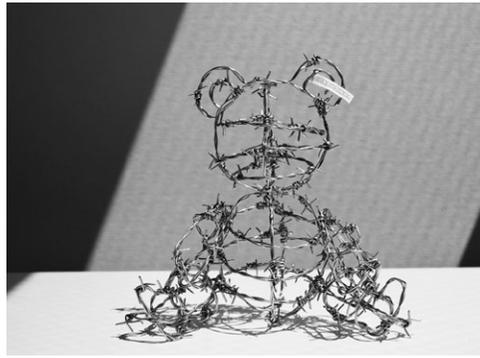
でやっています。

このユニット名なのですが、もともと三回目の展覧会のタイトルとして付けた「現代美術二等兵」という名前がしっくりきてユニット名にしました。美術界にヒエラルキーのピラミッドがあるとすれば、我々は最下層だなど。「竹やり持って戦ってるイメージで」とか言っていたら、兵隊は竹やり持ってないなと気づいたり。あれ民間人ですね。「最下層だけど最前線で戦う、前衛や！」っていう理屈を後から思いついて最近はそのつちを言うようにしています。



ふじわらかつひと 籠谷シエン

こういう作品をギャラリーで展示していると、たびたび「これは美術じゃない！」と言われることがあります。全然知らない年配の男性に「これ作ったん誰や！」と立たされて説教されたり、アン



抱っこしてちょ

ケート用紙にびっしりの批判とともに「あなたの思う現代美術の定義を四百字で書いて、この住所に送ちなさい」と書かれたり……。そういうことが続いたので「『美術』ちゃんまんねん、『駄美術』



こけしアレー

でんねん！」と開き直ったようなところもあります。なんでそんなに「美術かどうか」にこだわるのかなあと思っていたのですが、今思えばギャラリーという美術を扱うスペースで展示してるわけだから、美術だと思つて見に来て違和感を覚えるのは当たり前なことだなあと、俯瞰で見てもちょっと反省してみました。そんな展示でも続けていくうちに「ほっとしました」とか「気が楽になりました」と言われることもあつて、そういう時は普通にうれしいですね。

つて、やっと知り合いが数人見に来てくれるような状況でしたが、最近SNSにアップした作品が拡散されてネットニュースになったり、商品化されたりという事も起きて、長く続けてみるものだなあと「継続は力なり」をひしひしと感じております。

そうそう、ミロのヴィーナス像を和装に改造し、竜馬像に似せた「桂浜バージョン」という作品もありました。高知との唯一の接点かもしれません。

次回はぜひ作品展示で高知に伺いたいものです。



ぐれダルマ



桂浜バージョン

げんたいびじゅつにとつへい
一九六七年 大阪府大阪市生まれ(籠谷)
一九六八年 大阪府堺市生まれ(ふじわら)
籠谷シェーン、ふじわらかつひとからなるアートユニット。
生真面目で堅苦しい現代美術にクスッと笑えるスパイスを加えた作品を制作。

生きたい場所がある。だから、生業を創る。

有限会社はたやま夢楽(むら)

代表取締役社長 小松 圭子

安芸市の奥山で、高知県の地鶏「土佐ジロー」を飼育、加工、販売している。そして、ジローを提携する食堂宿「はたやま憩の家」を運営している。

前回の寄稿から五年。山奥での経営は、突如、隆起してくる大小さまざまな山を乗り越えながら、なんとか続けている。会社の存続だけを考えれば、引越しをするなど、打つ手は増えてくるだろうけれど、私たちは、畑山で暮らしたいから、生業を創ろうと、もがいてきた。しかも、畑山を好きになってくれる人の輪を広げようと、商品をPRするだけではなく、畑山暮らしを伝えようとしてきた。

お客さんと密に繋がりたいので、「憩の家」への集客数も減らした。嫁に來た九年前は、年間八千人弱の來店があり、多い時では一日に

百人近い人が来てくれた。広報の仕方を変え、來客数は三千人を割り込むほどになった。お客さんとの対話を楽しみながら、畑山で共に遊ぶ時間ができた。そして、リピートしてくれる人たちも増えていった。時間はかかっているけれど、大波の度に、こうして紡いできた人の縁に支えられ、今日を迎えられている。

【重なる大きな試練】

一昨年前の夏のこと。暗い表情で帰ってきた夫が、行政の指定管理業者制度で運営している土佐ジロー加工場の取り壊しが決まったと口にした。

多くの養鶏業者が專業化し、大規模化をする中、限界集落での経営のため、独自路線を開拓してき

た。その主軸になる加工場がなくなる。資金的な余裕もなく、購入できる土地も集落内にはない。加えて公共水道もなく、地下水脈も乏しい。衝撃的な出来事だった。廃業がよぎった。一方で、毎日のように、全国各地からお客さんが訪ね來た。「こんな鶏肉は食べたことがない」「今までで一番美味しい」と幸せそうな笑みを浮かべてくれる。「なんとか畑山で、継続したい！」そう思った。

新たな土地を得て、地下水を掘り当てた。建設と施設整備にかかる見積り額は、四千万円を超えた。金融機関からの融資をお願いする一方で、インターネット上で資金集めをするクラウドファンディング(CF)に挑戦した。CFの目標としたのは建設の着資金にと考えた五百万円だった。

日ごろからのお客さんとの交流が実り、CFはわずか半月で五百万円の支援を得た。安堵した矢先、西日本豪雨に襲われた。未曾有の雨に、集落は完全に孤立した。車で移動できる距離は一キロメートルにも満たない。歩こうにも、道が完全に崩落し、濁流が行く手を阻む。固定電話も携帯電話も繋がらず、電気も途絶えたまま。

絶望の淵。加工場の建設は無理だろう。CFでの支援金はどうやって返金したらいいのか。救援は来てくれるのか。ジローは見殺しにしなければならないのか。そんな





な中、夫はこう言った。「建物は被災していない。ジローが共食いするまでに数週間はある」。集落にいる高齢者の安否確認をしながら、自前のユニボなどを使い、鶏舎までの道をひとまず直そうと始めた。

孤立から三日目。まだ雨の止まない中、電力会社の人が崖にロープを這わすなどして来てくれた。翌朝には雨も上がり、土木会社の社長たちがリュックに食料や子どもたちへのお菓子を詰め込んで、歩いて来てくれた。間もなく、消防と自衛隊のヘリが来てくれた。山際から現れたヘリコプターに思いつき手を振ったのは、初めて

だった。

ジローの世話のため、山へ残る夫たちに手を振り、自衛隊のヘリで市街地へ避難させてもらった。SNSやブログで被災した写真や動画を発信すると、テレビや新聞でも紹介してくれた。すると、電力会社の本社から状況確認の電話や、行政からの問い合わせが入るようになった。電気が数日後に復旧し、道の仮復旧もその後すぐだった。ジローの餌やりや雛を守ることができ、豪雨から二十日目には加工場を稼働することができた。

すぐに、お客さんから応援のメッセージや注文が届いた。心待ちに取引を再開してくれた飲食店や、社内で注文書を回覧して共同購入してくれたり、募金を集めてくれたりする企業もあった。翌月には、憩の家も、予約客への営業を再開することができた。八月末で締め切ったCFは約四百人から八百万円を超える支援が集まった。

孤立は解消されたが、車両の重量制限や時間規制は解けなかった。山奥での建設に加えて、建設資材の搬入に制限が加わり、工期が伸びていった。それでも、諦めずに



対処してくれる関係各所の尽力で、二〇一九年三月末までに新しい加工場が建設でき、許認可も無事に通った。八重桜の舞う中、CFの支援者や関係者を招いての記念式典を行った。餅まきには、子どもたちの同級生たちも駆けつけてくれ、賑やかな宴となった。

加工場は、順調に稼働している。念願だった新商品も誕生した。缶詰のアヒージョや、レバーペースト、骨付きスモークチキンが好評を得ている。

【これからも畑山で生きたい】
今年の梅雨は大過なく、夏が来た。稲がたわわに実り、柚子が太

ろうとしている。丘の上にポツンとある「憩の家」に、連日、県内外からのお客さんが来てくれている。土佐ジローを食べて、庭にあるハンモックに揺られながら過ごす午後のひと時。耳に入るのは、川の流れゆく音、小鳥たちのおしやべり。風が奏でる葉擦れの音楽。夜になれば、手元すら見えない漆黒の闇に反して、星明りのできる逆光に驚く人たち。天の川に、星が流れゆく。ホタルが舞う夜もあまた夜もあった。

「最高の贅沢」とお客さんが言う日常があふれている。私たちの自慢の里。これからも、畑山で、生きていきたいと願う。

こまつ けいこ

一九八三年 愛媛県生まれ。早稲田大学卒業後、愛媛新聞社へ入社。

二〇一〇年結婚を機に、高知県へ移住。二〇一五年、有限会社はたやま夢楽社長就任。二児の母。

ワンポーズクリエイター®ってなに？

外山 晴菜

高知県の皆さま、こんにちは。
ワンポーズクリエイター®の外山晴菜と申します。ポーズ専門の振付師です。からだのかたちを作っています。マナー講師や元モデルではありません。人のチャームポイントやメッセージをぎゅっと込めたワンポーズをクリエイトします。

そんな人いるんですか？ はい。深い傾きとともに、はい。ポーズを専門に作る人がいても面白いじゃない！と、日本で一人のポーズ専門の振付師として二〇一七年に「ワンポーズクリエイター®」を商標登録しました。ポーズの奥深さに心躍らせながら（ぜひこのかたち、想像してみてください）取得しました。今までに、CM等広告や舞台のポーズ・振付演出を二百本以上担当しました。俳優の決めポーズ、新商品を覚えてもらえるインパクトのあるポーズ、子供達と一緒に真似できるポーズ…などのオーダーに応えるべく奮闘し

ています。ポーズで人の可能性を引き出し、世の中に「一目惚れの瞬間」を増やすことを目指しています。

今回は皆さんが普段意識したことがない、というか意識したらガチガチになっちゃうじゃ〜ん！だから写真苦手なんじゃ〜ん！と思っているかもしれない、ポーズの世界を少しでもだけ覗いてもらえたらと思います。

早速ですが…ポーズ、とっていますか？ 写真に写る際にしましたか。目立つために？ それとも隠すために？ 誰かとの思い出をもっと素敵に残せるように？ 写真に写る以外ではハイタッチや、円陣を組むポーズの経験もあるかと思えます。きつと、その場にいる人たちの気持ちを一つにするためにしたのでしょうか。実は、どなたも毎日ポーズをとっているんです。私たちの日常の動きはポーズの連続でできています。神様がこの瞬間をエイツ！と一時停止したら、びた

っ！と誰もがキマっているはずです（「なんでそうなった!？」と聞きたくなるほどのクリエイティブなポーズが生まれているかもしれません）。教科書の右下に落書きした、パラパラ漫画を思い出ししてください。あれは棒人間によるワンポーズの集まりです。ポーズの連続が、授業中の私たちをクスツと和ませてくれましたよね。

ポーズってスゴいんです。ひと目で伝わりと印象に残るので、役に立ちます。人の目を惹いたり、目に見えないはずの気持ちや態度を表すことができます。相手と心を合わせることができ、意識してもしなくても、言葉を使わずに場の空気を変え、人の気持ちを動かします。からだひとつでできる最強のコミュニケーションツールなのです。『立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花』という言葉があるように、からだの私たちで人に与える印象が変わるということを、ずいぶん前から私た

ちはもう知っていたようです。

とはいえ、ポーズは難しいとおっしゃる方が多い。からだが硬いから？ 恥ずかしいから無理でしょうか。ではこんな風にとらえてみてください。『じゃんけんだって立派なポーズ！』。手先の表情とキレ。スピードを変えると「後出し」。高等技術です。皆さん取得済みの。「笑顔だって顔のポーズ！」ですよね。表情筋の細やかな調整、ニュアンスを伝える首のかたむき加減！ 振り向きざまに優しく微笑めば、相手をドキッとさせられるでしょうね。このように多くの人が日常で自然にやっているポーズは、特別なことではありません。

ワンポーズクリエイター®として、大切にしていることは二つです。

①本人の魅力や想いの受け皿となるワンポーズを作ること



②本人がポーズのかたちにとらわれず、自然と自由に動きたくなくてしまう空気を作ること

この二つは向かう方向が異なるのですが、人の可能性を引き出すために、どちらも忘れてはいけない課題です。ポーズの専門家と名乗る数年前まで、日本各地でダンスの公演とワークショップを行なってきました。障害を持ったお子さん、ビジネスマン、東北のお年寄り；あらゆる世代の様々な個性を持った方々とのやり取りと、場所や空間を活かしたダンス公演の開催です。参加者を覆っていた何かが外れ、照れながらも動き出し、息も弾み、とびきり愛しいギコチナイ動きの彼らを目のあたりにすると「人がなぜかやってみたくなくなるポーズってあるんだ」「相手に動いてもらう前にまずは自分から動くこと

が大事なんだ」、
 そう痛感したのを覚えています。こうした経験が今の自分に役



(C) Yoshiki Romantico

立っています。

真っ青に晴れた空にパッと咲く黄色い菜の花のように、目が奪われ、心に対象が飛び込んでくることを、一目惚れの瞬間」と私は呼んでいます。世の中にその時間が〇・一秒でも増えたらいいなと夢見ています。これは皆さんに、モデル並のスタイルを目指して欲しいわけでもなく、毎日一張羅のおしゃれで過ごすのを勧めしているわけでもありません。好きなものを食べているとき。失くし物が見つかったとき。遠くの夕陽を眺めているとき。あなたのそんなふとした瞬間の何気ないワンポーズが、美男美女問題を軽々飛び越えて誰かの心を強く揺さぶることは、珍しくないのです。目の前の人の内なる魅力が外に溢れる一瞬に出会いたくて、どうやって引き出せるのだろうか、どんな空気で接したらもっと見せてくれるのだろうか、と、試行錯誤する日々です。

高知は大好きで何度かお邪魔しています。二〇一三年にはかるぼーとで、高知市文化振興事業団の皆さまと演劇の手法を用いたワークショップを作っていた高知の方にワークショップを受けてもらいました。今、思いつくのはこんなイベントやポーズのワークショップ。高知のいいところをアピールする企画をやりたいです。

・長い日曜日市をマネキンのように皆で一列でポーズ「はじからはじまてようこそ日曜日市(仮)」※全員、手にはマップ。買い物に来たお客さんが持ち帰れる

・桂浜で「こんな見たことない！百通りの龍馬さんポーズ(仮)」



(C) Yoshiki Romantico



(C) Yoshiki Romantico

※参加者全員龍馬さんになりきる。仕上がりイメージ「ウォーリーを探せ」状態 etc.

観光課の方、イベント企画会社の方、高知推しインスタグラマーの方、いかがでしょ！ご連絡お待ちしております。こんなことを真剣に考えているワンポーズクリエイター®が、皆さんと高知でお会いできますように！

とやま はるな

一九八四年東京都出身・在住

Instagram: @I_pose_creator

HP: harunatoyama.com

ビブリオバトルのスヌメ

佐藤 元紀

本を使ったコミュニケーションゲーム。そのようにビブリオバトルは評される。持ち寄った本を片手に一人五分で語り、二〜三分の質問時間を設ける。そしてグループ全員が語り終えたところで、「一番読みたくなった本」を一人一票で選ぶゲームがビブリオバトルである。バトルでは勝者ではなく、「チャンプ本」を決定する。勝つも負けるも自身ではなく、「本」であることがこのゲームの面白いところである。

ビブリオバトルは、二〇〇七年に考案された新しい書評ゲームではあるものの、現在では教育の場を飛び越え、公共図書館、書店の店頭やカフェなど様々な場所で実施されている。また、全国大学ビブリオバトル、全国高等学校ビブリオバトルなどの大会が毎年催され、海外へも広がりを見せてつつある。

ビブリオバトルの楽しみの一つに「ライブ感を重視した語り」がある。予め原稿を用意するスピーチやスライドなどを用意するプレ

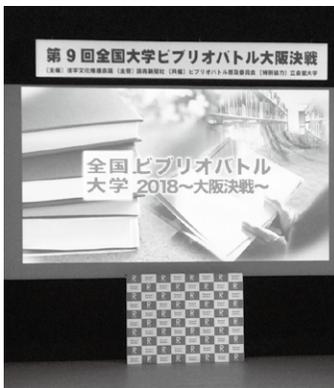
ゼンとは異なり、その場の雰囲気に合わせて参加者達のことばによってビブリオバトルは展開される。もちろん、相手に自らの思いを的確に伝達するための話の構成は必要となる。しかし、目的ではない構成された話の先にある、伝達し「共有すること、すなわち、他者との『communicate（分かち合い・共有）』こそがビブリオバトルの目的である。「人を通して本を知る、本を通して人を知る」を掲げ、本を媒介として生まれるコミュニケーションを軸としてビブリオバトルが実践されている理由はそこにある。

ビブリオバトルを実施すると、

「話が苦手だから…」という声をしばしば耳にする。しかし、求められるのは立て板に水の巧みな話術ではない。大切なのは、伝えようとするコミュニケーションの努力によって他者と「何か」を共有することである。そこに生じるアドリブも含めた参加者達の「いきいきとした語り」がビブリオバトルの魅力となっている。

ビブリオバトルの面白さを参加者に尋ねると、「日頃知ることのない本、興味とは異なる傾向の本に出合えること」、「本の読み方に出ているその人の生き方を知れること」という答えが返ってくる。多角的な視点を獲得し、多様な価値観に触れられる体験をビブリオバトルの面白さと捉える参加者は多い。新しい「もの見方」や「考え方」に触れる機会はいくつになっても楽しいものだ。そうしたワクワク体験の場としてのビブリオバトルの活用をおススメしたい。

繰り返しになるが、ビブリオバトルは「ゲーム」である。肩や肘の力を抜いて楽しむことが何よりも大切。ゲームの開催場所やテーマは自由に設定することができるため、高知県特有の地理条件を活かしたビブリオバトルも可能である。桂浜、沈下橋、カルスト、ジオパーク、ゆず畑……場所に適したテーマを設定すれば、ロケーシ



ョンも手伝ってゲームはより楽しくなるはずだ。一ひろめ市場で「酒」をテーマにビブリオバトルなんて、ワクワクする。



さとう もととき

一九八三年 愛知県一宮市生まれ
高知工業高等専門学校ソーシャル
デザイン工学科講師。

ビブリオバトル普及委員を務め、「高知ビブリオバトル」を運営しながら、高知県内のビブリオバトル講座や全国大学ビブリオバトルの予選・地区決戦等を主催する。

「アンテナ」 役者、刈谷隆介さん との出会い



下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くとって沢山のひと繋がる。

僕がまだ営業の仕事をしていた時、携帯電話に登録していない番号から電話がかかってきた。電話に出てみると、英語で「ハロー、ホワッツ、ネイム、アハー、ユ、スピーキング、イングリッシュ、アハー」などとちよつと怒っているような口調でまくしたてられた。僕は、たぶん間違いですよと言つて電話を切つた。するとすぐに同じ番号からまた電話がかかってきた。恐る恐る電話にでると、日本語で「ごめんごめん下尾さん、僕です。刈谷隆介です」と。刈谷君とは、文化高知No.207で書かせてもらった、故・帆足寿夫氏の劇団と一緒に芝居をしていたメンバーである。でも当時は、携帯に登録していないぐらいの関係であった。しかも僕の刈谷君に對

してのイメージは真面目で、まさか、このようなイタズラ電話をかけてくるとは想像も出来なかつたので、まったく気づかなかつた。ちなみに電話の内容はまったく覚えていないが、刈谷君に対してのイメージは、この一本の電話でがらつと変わった。

それから、仲良くなった刈谷君と、芝居の打ち上げで公演した演目のパロディをブリーフ一丁でおふざけしたり、芝居以外でもパフォーマンスをやらせてもらったりした。

刈谷君はどんなふざけた事でも真剣に取り組んでくれ、一が十にも二十にも膨らんで一緒にやっている僕も楽しくてしかたがなかつた。最近は一緒にやっていないので、またなにか一緒にと思つたりしている。

僕が営業の仕事を辞めてカフェを開いてからもちよくちよく遊びに来てくれ、いろんな話や相談の

できる関係になつていった。

ある日、高知演劇ネットワーク演会プレゼンツ演劇実験空間『蛸蔵ラボ』というイベントに一人芝居で参加すると聞かされた。

蛸蔵ラボとは三十分以内の小作品を持ち寄り、上演。個人、団体関係無く、スキルアップと交流を目的に開催する演劇公演である。

その蛸蔵ラボに参加した時の刈谷君の一人芝居は、ほんとにすかつた。

認知症になつたお父さんを介護する息子が追い詰められていくという内容であつたが、僕は、初めて芝居を見て涙が溢れた。刈谷君の演技はリアルで心を打つ何かがあつた。

僕だけではなく会場中にすすり泣く声が響いていたのでまちがひなくみんなの心を打つていた。

その演目は、その時見た高校の先生が是非生徒に見せたいと、高校で再演する事に。その時のアンケートを見せてもらったが、「初めてお芝居を見たがすごかつた」「もつといろいろ見たい」とか「心を動かされた」とか、高校生たちの心もつかんでいた。

その他にも刈谷君は、県が作った南海トラフ地震対策啓発ドラマ「その日、その時：」では地震がおきたあと家族とはぐれた、お父さん役を熱演したり、NHK第三

十九回創作テレビドラマ大賞「川瀬」では、俳優・勝村政信さんと二人での重要なシーンを、プロの役者とまったく遜色なく演じ、活躍の幅を広げている。

今、現在は劇団センター90にいたメンバーを主に立ち上げた、カラクリシアターとからくり劇場という兄弟劇団にて、年二回お芝居に出演している。

このあいだ見たカラクリシアターのお芝居「永遠のイノセント」も涙が出た。年をとつたから涙もろくなつているのではない。そこには、リアルな芝居があり刈谷君、他団員の熱演があるからだ。是非刈谷君のようにこの高知でもお芝居をがんばっている人がいるのを知ってもらいたい。余談ではあるが、刈谷君の息子が第二十四回高知県小学生将棋選手権大会低学年の部で高知で一位になり高知代表として全国大会に出場するとのこと。刈谷親子から目がはなせない下尾仁である。

しもお ひとし

一九六九年生まれ

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

6～7月の事業から

初夏の市民講座

市民講座は、市民の生活文化の向上、また社会福祉の増進を目的とした公民館活動の中心となる講座の一つとして、その時々々の旬なテーマを設け、毎年、五月～七月に『初夏の市民講座』、十月～十一月に『秋冬の市民講座』の計二回、約五講座をそれぞれ開講しています。

今回の初夏の市民講座は、TVや書籍でも取り上げられている今話題の色鉛筆の正しい塗り方を学ぶ「ぬり絵de学ぶ『美術のび』」色えんぴつ編、RKC調理製菓専門学校の講師を招いて、簡単に美味しい本格的なカレーを作った「THE・スパイスカレー」、他にも「キットでつくる簡単カルトナーージュ」、「山と近代文学」。「夏に負けないカラダ作り」太極拳からはじまる一日」とバラエティーに富んだ組み合わせでの開講となりました。

なかでも、「夏に負けないカラダ作り」太極拳からはじまる一日」の講座は、大人も夏休みにラジオ体操をする子供に負けないために、健康法の一つとして永く愛好されている太極拳を覚えて、健康的なプチ習慣にしようというテーマで開講したところ、平日の朝から二十九名の元気な老若男女

女が参加しました。

講師には、鴨部にある公益社団法人日本武術太極拳連盟に所属され、公認太極拳A級指導員資格を持ち、毎年開催される全日本武術

太極拳選手権大会で、度々、上位入賞をされている岡田淑子先生をお招きしました。

今回の講座で行った入門太極拳は、太極拳を日本人向きに一部の動作を簡易にすることで、初心者の方でも覚えやすいように改良したものです。講座時間の都合で、入門太極拳からいくつかを抜粋しての講座でしたが、岡田先生の適切な指導と場の雰囲気や和らげるお話で、受講生は汗をかきながらも、元気な声を出して、笑顔で体を動かしていました。

受講生からは、「面白い講座なのに講座の回数が少なすぎる」「疲れたけど、すごい楽しかった」など多くの声があり、今後同講座以上の評価が得られるような講座の開催に努めようと思えました。

〈参加者数 百名〉



高知市立中央公民館事業 第189回市民映画会 「記者たち 衝撃と畏怖の真実」

「イラクは大量破壊兵器を保持している。」政府が捏造した情報により始まったイラク戦争。真相を追い続け、真実を伝えることに執念を燃やした記者たちの知られざる実話を映画化。
☆同時上映「マダムのおかしな晩餐会」

日 時：2019年9月12日(木)、13日(金)
会 場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール
入場料：一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞できます。
・一般前売 1,300円(当日1,500円)
・割引 1,000円(前売:当日とも)
※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方対象
お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071



©2017 SHOCK AND AWE PRODUCTIONS,LLC.ALL RIGHTS RESERVED.

高知市文化振興事業団

高知市立中央公民館事業 第六十九回高知市夏季大学

夏季大学は中央公民館事業として一九五一年にスタートしました。「市民の知的開発、文化教養の向上、情操の涵養を図る」という開講当初に掲げられた目的のもと、毎年、経済・科学・政治・芸能・社会・歴史・スポーツなど、各界で活躍する著名人・有識者の皆様にご登壇いただいております。

本年は、わずか二日余りで受講票が完売し、延べ一万六百十三人といたくさんの方々が受講されました。一人を超えたのは八年ぶり、一日当たりの受講者数としては会場をかるぼーとに移した平成十八年以降、二番目の多さを記録しました。

初日十六日(火)の講師、NHK報道局記者主幹の大越健介さんには、世界中を取材しているご自身の経験を基に、「壁」が多く築かれつつある今日の社会を生きていくうえで大切なものは何か、ご講演いただきました。ユーモアたっぷりな親しみやすいお話は、初日にふさわしい大変示唆に富んだ内容でした。

十七日(水)の講師、落語家で医学博士の立川らく朝さんに

は、「ヘルシートーク」と「健康落語」の二本立てにてご講演いただきました。真打の嘶に会場はたくさんの笑いに包まれ、笑いの効用について、受講生の皆さんに実際に体験していただけたのではないかと思います。

十八日(木)は、慶應義塾大学大学院教授の岸博幸さんに、高知のような地方都市の、今後の経済活動に必要な要素について、様々な事例を交えてご講演いただきました。他人との関係性に関わるお話では、ビジネスだけでなく実生活を豊かに過ごすヒントがあり、受講生の真剣な眼差しがとても印象的でした。

十九日(金)の講師は、気象予報士の天達武史さんで、近年の異常気象について、あるいはこのまま地球温暖化が進行した未来について警鐘を鳴らした大変わかりやすくご講演いただきました。私たちの生活と切り離すことはできない気象について、多くの受講生が関心を深められたことと思います。

二十日(土)は、元プロテニスプレーヤーの沢松奈生子さんに、現在のテニス界と今後の

展望について、またご自身の活動を通して得られたことなどご講演いただきました。大変切りの良いトークに会場は沸き、世界のトップレベルで活躍された沢松さんならではのお話は非常に意義深いものでした。

二十三日(火)は、株式会社Dホールディングス代表取締役社長の松村厚久さんにご講演いただきました。体調が芳しくない中、社員の方のサポートを受けながらのご登壇でしたが、病魔と闘い続ける姿勢は受講生の皆さんに響いたようで、またサプライズ演出もあり、イレギュラーな中でも満足度の高い講演だったのではないかと思います。

二十四日(水)は、フリーアナウンサーでことばのアカデミー校長の河野景子さんにご登壇いただきました。他人とのご自身の経験と理論に基づいた、河野さんならではの話をいただきました。質疑応答では講演内容から外れた質問が飛び交いましたが、真摯で寛容な対応に河野さんのしなやかさがうかがわれました。

二十五日(木)の講師は、サイエンス作家の竹内薫さんでした。近い将来やってくる人工知能が台頭する社会のため重要となってくる知識や、現在の最先端技術について、専門

的な事柄も大変平易に伝えていただきました。とても面白い講義だったという声も聞かれ、未来を想像する豊かな学びの空間が広がっていたのではないのでしょうか。

二十六日(金)は、作家の林真理子さんにご講演いただきました。県外から駆け付けた方もいらつしやるほどの人気ぶりで、開演後も来場者が途絶えず、急遽小ホールを開放して対応しました。大河ドラマや元号改正といったトピックスのほか、高知愛に溢れた講演に、客席は終始笑顔の絶えない様子でした。

最終日の二十七日(土)は、俳人の夏井いつきさんにご講演いただきました。開場前から多くの方が詰めかけ、この日も小ホールを開けての対応となりました。俳句の魅力や、俳句を通じた様々なエピソードは強く心に残るものばかりで、夏井先生の情緒溢れる語り口も相まって、とても心地よい空気が会場を包んでいましたように思います。

来年、夏季大学は七十回の節目を迎えます。会場のアンケートで寄せられた様々なご意見も参考にしながら、講師陣や会場運営など、より充実した、多くの方に参加いただける夏季大学となるよう取り組んでいきたいと思っております。
(受講者数延べ二万六百十三人)



高知を撮る

第35回写真コンテスト入賞作品

赤とんぼ

(平成30年9月22日 南国市久枝・物部川河口付近)

松木 宣博

秋の気配を感じる青空の下、風に乗って群れ飛んでいる赤とんぼの写真を撮っていると、偶然にも赤いヘリコプターが高知空港に向け降りてきました。まるで赤いヘリコプターをとんぼ達が出迎えているようでした。

そのタイトルに衝撃を受けた。

「僕のプールにサメがいる〜室内のキセキ・廃校水族館〜」(さんざんテレビ)である。廃校になった小学校が水族館に生まれ変わってからの一年間を紹介した興味深いドキュメンタリー番組だった。けれど、内容にもまして、私の頭に焼き付いたのはそのタイトルである。「僕のプール」と「サメ」の取り合わせが強烈だった。眠っていた子供心を揺さぶられた感じがした。そして、思い出した。

僕の家にはサメがいる。子供時代、この妄想に悩まされていた。ユザメという名のサメである。昭和三十年代だった。

私の家には、祖母と曾祖母が同居していたが、風呂から出ると、二人が声をそろえて言うのである。「ユザメが来たら大変ぞね!」「早う寝んと大事!」その声も顔も恐ろしかった。父や母も唱和した。「ユザメが来るぞ!」「来たらどうするぞね!」

一体どんなサメなのだろうと思っただ。ふとんに入っても、そのことが頭から離れなかった。

私の想像の中では、ユザメは風呂

サメがいる!



風俗歳時記

桶の中に住んでいた。湯の中に溶け入り、普段は姿を消している。私が風呂を出ると、しだいに現れ出て、泳ぎ始める。そして木蓋を風呂の中から何度も何度も突き上げる。蓋は激しく揺れる。湯があふれる。その湯といっしょに、ユザメはぬるりと外へ出る。あふれた湯は風呂場から出て、とうとうと家の中を流れ始める。流れる湯の中をユザメが私の方へ向かって泳いで来る。そんな空想にひたりながら眠った。夢の中にもユザメは出て来た。私が寝ている部屋は湯で満たされた。大きな風呂の底にいたような感じがした。湯の中を大きなユザメが泳いでいた。

不安でもあったが、不思議な余韻の残る夢だった。

日常性を脅かす不安の象徴としてサメはイメージされやすい。子供時代に誰もが感じる、未来への漠とした不安や恐れ、期待や興味。そんなものを「ユザメ」は表していたのではないか。

子供はみんな——大人になっても——心の中にサメを飼っている。

(本の虫)

キエフ国立フィルハーモニー交響楽団 2つの「第九」コンサート



東欧における最も優れたオーケストラとして評価されるウクライナの名門・キエフ国立フィルハーモニー交響楽団が来高。ドヴォルザーク「新世界より」とベートーヴェン「第九」の有名交響曲を楽しむ贅沢なコンサートが実現します。クリスマスの宵に、2つの「第九」を是非お楽しみください。

【日 時】2019年12月25日(水) 19:00開演
【会 場】高知市文化プラザかるぼーと 大ホール
【入場料】全席指定 ※未就学児入場不可
一 般 前売り 10,000円 当日 10,500円
高校生以下 前売り 5,000円 当日 5,500円
お問い合わせ:高知市文化振興事業団 088-883-5071

空晴第18回公演 「明日の遠まわり」



家族・夫婦・周りの人々との当たり前だけど大事な関係をテーマに、優しい世界を創り続けている劇団「空晴」。
今回の公演「明日の遠まわり」は、離婚した夫婦を軸に「時間」の進み具合が人によって、そして事象によって違うことで起こる勘違いや誤解から生まれるコメディ要素を多分に含んで描く。
誰でも辛い経験や思い出したくない過去がある。かつての「痛み」と向き合う人間に対する優しさや、自分にそれが襲い掛かってきたときの不安と向き合うとき、周囲の人々の温もりに触れ、明日を生きる希望となることだろう。
高知初上陸となる空晴公演をお見逃しなく!

【日 時】2019年9月14日(土) 18:00開演
2019年9月15日(日) 14:00開演
【会 場】高知市文化プラザかるぼーと 小ホール

【入場料】全席自由 ※未就学児入場不可
前売り 一 般 3,500円
22歳以下 2,500円
高校生以下 1,500円
当 日 一 般 3,800円
22歳以下 2,800円
高校生以下 1,800円
会員価格 一 般 3,150円
22歳以下 2,250円
高校生以下 1,350円

お問い合わせ:高知市文化振興事業団 088-883-5071

風 伯

部屋は暗く、 ものごとは不便に

私は最近、検索病に罹っているようだ。ネットを検索するといろんなものが簡単に呼び出せるし、調べることができるし、ほとんどのことがネット上で解決してしまう。

だから、辞書を引くこともほとんどなくなった。本も電子書籍などで読むと、分からない漢字や英語を選択するだけで、内蔵辞書やネットから説明文

を表示してくれる。あまりにも便利になりすぎて、歳をとるにつれて五感が退化しているのではないかと思えるフシもある。

ところで私の車のナビは古いので県外に行くとしばしば「リポートします」とくる。道路を道なりに走っていつの間にか走ってしまう。しばらくそのまま走っているとナビはウンともスンともい

今号の表紙

もう少し

結城 董

十五夜、うさぎの親子が月でお餅をつくるために急いで月に向かって様子を見ました。

あともう少しだとわくわくしているうさぎの気持ちを想像し、「もう少し」というタイトルを付けました。

平和で柔らかなイメージにしたかったので、満月の形と同じようにイラスト全体も丸におさめました。

(ゆうき すみれ/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

確か「明るくなりすぎると大事なものが見えなくなる」という意味の言葉がある。夜が明るすぎて、大事なものを見失っているかも知れないし、便利すぎて気付かないまま、大事なものが見えなくなっているかも知れない。
ネットを切り、明かりを消し、便利さばかり追い求めず、不便だからこそ活発になるかも知れない五感を研ぎ澄まし、不便だからこそ面白い世界を探してみたい。

(霖)

90分^{ぶん}で
1泊^{ぼく}2日^か?!
2019
キッズ
KIDS
オータム
AUTUMN
パーティー
PARTY
げき^{げき}じょう
劇場^{じょう}が
キャンプ^{きんぷ}
場に?!
0才^{さい}から
うた^{うた}って おど^{おど}って
みんな^{みんな}で
パーティー!
in かるぽーと^{かるぽーと}キャンプ^{きんぷ}場^{じょう}
2019年10月12日(土)14:00~・17:00~13日(日)10:30~・14:00~
高知市文化プラザ かるぽーと 大ホール